

クリスチャンはなぜ洗礼を受け教会の礼拝を毎週守るのでしょうか？

答#2 天に宝をたくわえるため

クリスチャンが洗礼を受け教会に行くもう一つの理由は、やがて来る「**天の御国**」(完成された「**神の国**」)において神様から多くの報いを頂くためです。その報いの為に地上において「**天に宝をたくわえる人生**」を歩むように努めるのです。このことを聖書がどのように教えているか、聖書を文字通りに捉えてまとめてみた**私の理解**(字義的解釈と言う)を述べてみます。

聖書の教える「**天の御国**(天国)」は「**神の国**」とも言われ、大きく分けて**現在**と**未来**の**二つの面**を持ち、それぞれが又**二つの面**を持っています。先ず**現在**の「**天の御国・神の国**」の**二つの面**についてですが、**一つ目**は、生きている全ての人々の間で、神が**ご聖霊**(=御霊)を通して支配されている**領域**です。神の子イエス・キリストが十字架で死ぬことにより「**罪の贖い**」の業(わざ)をなし、復活して天に昇られた後、神(キリスト)はこの地上に**ご聖霊**を送られました。そして、**ご聖霊**が支配する時代(**聖霊の時代**)になりました。この「**神のご支配**」の、最も分かりやすい例は現存する「**教会**」です。教会とは厳密にはそこに集まっている「**聖徒たちの集り**」のことで、内住の神の**御霊**(**ご聖霊**)によって支配されている人々の集まりです。それで教会時代のことを**聖霊時代**とも言います。内住とはクリスチャンの心の中に**ご聖霊**が住んで、毎日の生活において聖書の言葉を通して導きを与えて下さることです。

「**天の御国・神の国**」の**現在**の面の**二つ目**は、誰もが普通に考える「**天国**」のことで、亡くなった方の**霊魂**が集まっているところです。この意味での「**天国**」には場所が**二か所**存在します。一つはクリスチャンの**霊魂**が集まる場所で「**パラダイス**」と呼ばれています。厳密に言えば、**天国**はこの**パラダイス**のことです。もう一つは**ノンクリスチャン**の**霊魂**が集まる場所で「**ハデス**」(一般に「**黄泉**」と訳される)と呼ばれています。この一般に「**天国**」と呼ばれる「**天の御国・神の国**」は実はまだ完成されていない状態で、キリストが再臨(地上に再び来られること)されてから完成します。その時に「**パラダイス**」に集まっているクリスチャンの**霊魂**には「**復活のからだ**」が与えられて「**天の御国・神の国**」に移動します。**ノンクリスチャン**の**霊魂**はまだこの時には復活しません。

さて、次に**未来**の「**天の御国・神の国**」についてですが、ここからは「**天の御国**」と言う表現で統一します。「**天の御国**」は上記で述べたようにキリストが再臨される時に完成します。キリストが再臨される時を聖書では「**世の終わり**」と言っています。これは今の時代の終わりのことで、人間の歴史が終わるものではありません。歴史のことを英語で **history** と言います。これは **his story** (彼の物語) から来ている言葉で「**神の物語**」と言う意味です。つまり、歴史は「**神の壮大な物語**」なのです。その中に、「**今の時代の終わり**」があるわけです。「**神の物語**」は永遠に続きます。

キリストが再臨されると新しい時代が始まります。再臨のキリストは先ずこの地球(天も地も)を罪が入る前の完全な地球の**ような状態**(「**完全に近い地球**」)に戻します。上記で述べたように「**パラダイス**」にいたクリスチャンの**霊魂**には再び**肉体**が与えられ、この「**完全に近い地球**」で生活することになります。クリスチャンの「**復活のからだ**」はキリストの「**復活のからだ**」と同じように**肉体**を持つ「**完全な栄光あるからだ**」で再び死ぬことはありません。そして各自神から「**天にたくわえた分**」の報いと職務が与えられ、キリストを**王**(最高権威者)として男女の違いもなく、キリストと共に「**完全に近い地球**」を治めて行きます。

キリストが再臨されて造り変えられる地球が最初の創造の時の「完全な地球のような」ものと上記で述べたのは、更にこの後、神は全く完全な「**新しい天と新しい地**」を創られるからです。つまり、**未来**の「**天の御国**」にも**二つの面**（二つの段階・ステージ）があるのです。**クリスチャン**が先ず第一段階の「**完全に近い地球**」で十分に（聖書は千年間と言っている）過ごした後、神は全く「**新しい天と新しい地**」を創られ、**クリスチャン**はそこで永遠に過ごすことになるのです。**クリスチャン**はこれら**二つの面**を一般に一つにまとめて未来の「**天の御国**」と言っています。しかし、実際は**未来**の「**天の御国**」にも二つの段階があることになり、この後説明しますが、この二つの段階（**二つの御国**）は大変重要なことなのです。

この第二段階（最終段階）の「**新しい天と新しい地**」が始まる前に、「**ハデス**」にいる全ての**ノンクリスチャン**の靈魂にも肉体が与えられて復活させられ、その時地上に生きている全ての**ノンクリスチャン**と共に父なる神の御座の前で、各自地上に生きていた時の行いに応じて「**神のさばき**」を受けます。このさばきは完全なもので、各自「**さばき**」に応じて報いが与えられます。**クリスチャン**はこのさばきのことを聖書のことばから「**白い御座のさばき**」と言っています。つまり、聖書によると、**全て**の人間（**クリスチャン**も**ノンクリスチャン**も）は必ず肉体を持って復活することになるのです。この「**白い御座のさばき**」の後、**ノンクリスチャン**は死ぬことのない「**復活のからだ**」を持って「**永遠の（或は「完全な」）滅びの刑罰**」を受けることになり、**クリスチャン**は「**新しい天と新しい地**」で永遠に生きることになるのです。大変言い難い厳しいことですが、これが聖書の教える**死後の世界**です。

さて次に、それではなぜ、**未来**の「**天の御国**」に**二つ**（二つの段階）が存在するのでしょうか。完全に明確な答えはまだ分かりませんので断言はできませんが、少しずつ簡単に説明してみます。私は先ずある中国人の**クリスチャン**聖書学者の「**終末論セミナー**」を思い出します。その学者は、キリストが再臨されたら、人間は**無限**と言われている宇宙に向かって開発して行くことになるだろう、と言いました。大変興味深い洞察だと思います。今でも人間は**無限**の宇宙に向かって開発しようとしていますが、現時点ではまだ「**不可能**」なレベルです。

一般に人間の脳は数パーセントしか使われていないと聞きます。アインシュタインでさえ10%だとか。そしてその数パーセントの脳の力と、人間一人の寿命が70年から80年の中で、人間はこれまでの歴史を通してここまで進んだ現在の文明を築いてきました。それが完全な「**復活のからだ**」と各自が100%の脳の力を持ちながら「**完全に近い地球**」で千年間もの長い間生きることになるとすると、理解不可能なほどとてつもなく素晴らしく進んだ世界を築き上げることができると思われます。

最初の人間アダムは、罪を犯す前には脳の力を100%使うことができたと言われています。別のことばで言えば、もし罪が入らなかつたら人間はどのような世界を築いていたでしょう。もしそれを知ることができるとしたら、そしてそれがまさしく「**天の御国**」なのです。神様は「**天と地**」を創造された時に、ご自分の創造を大いに満足され祝福されましたが、その「**天と地**」を知っている（体験した）のは最初の夫婦であるアダムとエバだけです。何ともったいない話でしょう。しかし、その状態を**クリスチャン**は「**完全に近い地球**」で体験できることになるのです。今の「**天と地**」は人の罪が原因で**自然災害**や**病気**が起こる不完全なものになっています。その不完全な「**天と地**」でさえ、世界中には数えきれない美しい自然と四つの季節があり、それらを通して人々の心と身体に元気を与える（リフレッシュさせる）のですから、罪が入らない前の「**完全な天と地**」がどのようなものであったか、私たちが少しは想像できるのではないのでしょうか。

しかし、聖書によるとそれはまだ「**完全な地球（天と地）**」ではありません。**クリスチャン**が「**完全な栄光のからだ**」を持って「**完全に近い地球**（宇宙も含めて）」を開発していつて

も、神が創られる究極的に完全な「天の御国」にはまだ及びません。それは神が創られる「新しい天と新しい地」によってのみ知ることができるのです。考えただけでもワクワクします。

「新しい天と新しい地」には「悲しみも涙もない」と書いてあります。又、「もはや海もない」とも書いてあります。と言うことは、最初の段階の「天の御国＝完全に近い地球（天と地）」には「悲しみと涙」があり、「海」もあることになります。**エデンの園**には海がなかったようです。又、海が怖いものとして登場するのは「**ノアの洪水**」後のようです。旧約の世界では荒れ狂う「海」は神の敵の代名詞であり、古代近東では大変に恐れられていました。2011年の津波による大震災を思い出すと荒れ狂う海の恐怖が良く分かります。

私が教わった学者でもある宣教師は、創造の時は陸と海の比率は多分現在と逆で海が3で陸が7だっただろうと言いました。それが、「**ノアの洪水**」で今の比率になったそうです。第一段階の「天の御国」は陸と海の比率は最初の創造の時のような比率で、遥かに「管理」しやすいものなのかもしれません。そして、それはなぜか「新しい天と新しい地」にはありません。何か神学的にも実際的にも大きな意味があるのかもしれません。神が創造される究極的な「新しい天と新しい地」の意義に関しては、この後終わりの方でもう少し説明します。

ここまで簡単に**未来**の「天の御国」について説明してみました。クリスチャンはこの「天の御国」で、地上の行いに応じて報いが与えられ、三位一体なる神、即ち、父なる神と子なる神（キリスト）と聖霊なる神と共に生きて行きます。そしてそこでは各自が「**天に宝をたくわえた分**」の報いを神から受けることになるのです。厳密には、この報いは第一段階の「天の御国」、即ち、「**完全に近い地球**」で実現するものと思われまます。この「**完全に近い地球**」は聖書の終末論では「**千年王国**」と呼ばれています。米国の多くのクリスチャン学者の見解では、「**千年王国**」は地上に建てられる「天の御国」のことであり、旧約聖書の「天の御国」の箇所ではこの「**千年王国**」を指して言っているものが圧倒的に多いようです。クリスチャンが洗礼を受け教会に行く理由は、この「**千年王国**」において神から多くの報いを頂くためであり、その為に地上において「**天に宝をたくわえる人生**」を歩むように努めるのです。

さて、ここからはクリスチャンになることを真剣に考えてみたい方や、既にクリスチャンの方で初心者の方々のための追加説明です。少し難しくなりますが、ぜひ最後までお読みください。

イエス・キリストの「天の御国」の説明に**タラントの譬え**があります。主人が3人の僕（しもべ）に各自の能力に応じて5タラント、2タラント、1タラントずつ与えて旅に出ます。通常1タラントは6000日分の賃金と理解されています。5タラントと2タラント預かった僕は、主人が帰ってくるまでにそれぞれ勤勉に働いて更に5タラントと2タラント儲けました（稼ぎました）。そして主人から全く同じように褒められ報いを受けます。主人は5タラントと2タラント儲けた者たちには喜びながら「（天の御国では）多くのものを任せよう」と語りました。1タラントの僕はお金を地面に埋めてしまい、戻ってきた主人からこっぴどく叱られます。結果的に1タラントの人は「天の御国」には入れませんでした。

これは単なる譬え話ではなく「天の御国」について重要なことを教えています。1)「天の御国」には地上での働き（行い）に応じて報いがあること、2)「天の御国」では各自に任される**任務（職務）**が与えられることです。別の聖書箇所にあるキリストの説明（約束）によると、この報いと職務の「**辞令**」は再臨のキリストが催す祝賀会（大宴会・大晩餐会）の時に与えられるようです。祝賀会では葡萄酒がふるまわれます。聖書には、復活後のキリストは「**復活の栄光のからだ**」を持ちながらも「**食した**」記録があります。復活したクリスチャンも祝賀会ではキリスト共に「**飲食**」するようです。「**飲食**」は「天の御国」でも大切です。

それでは、天の報いを頂く基準（**天に宝をたくわえること**）とは一体何でしょうか。世の中で成功する度合いでしょうか、教会で**クリスチャン**として活躍する度合いでしょうか、罪を犯さない聖い生活をする度合いでしょうか。これらは確かに基準の一つになると思われませんが、神は人の心をも計られるお方ですから、外面の行いだけでは分からない部分もあります。神は目に見える面と目に見えない面と両面から人の行いを判断されると思います。

上記で述べたように今は「**聖霊の時代**（＝教会時代）」です。神の**ご聖霊**が**クリスチャン**の心を守り導く時代であり、聖書は「**聖霊に導かれる生活を送りなさい**」と奨励しています。このことから、天の報いを頂く基準として最も可能性の高いものは**クリスチャン**がどれだけ「**御霊に導かれる信仰生活**」を送ったかだと言えると思います。もしかしたら、基準はこの一つなのかもしれません。なぜなら、「**御霊に導かれる信仰生活**」にはとても広く深い意味と範囲があるからです。

「**御霊に導かれる信仰生活**」として、先ず特に明確な基準は「**御霊の実**」をどれだけ実らせたかと言うことと、「**御霊の賜物**」をどれだけ用いたかと言うことだと思われます。即ち、これら二つがどのように「**天に宝をたくわえたか**」の主要な判断基準になるのです。なぜなら、再度強調しますが、「**聖霊の時代**（＝教会時代）」に**クリスチャン**が御霊によって歩む顕著で重要な生き方は、「**御霊の実**」をどれだけ結んだかと、「**御霊の賜物**」をどれだけ用いたかと言う歩みになるからです。聖書に記載されている「**御霊の実**」は**愛、喜び、平安（平和）、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制**があります。それで、これらの「**実**」を家庭で、教会で、学校や職場で、社会でどれだけ実らせたかが重要な「**天に宝をたくわえる**」判断基準になると思われます。

又、「**誠実**」や「**自制**」や「**寛容**（＝忍耐）」は自分に与えられている**能力・才能**と**賜物**をどれだけ真剣に出し切ったか（＝**完全ないのち**）ということにも繋がって来ますので、順境の時代を生きた**クリスチャン**は、学校や社会や職場でどれだけ自分の能力を発揮して成功したか、というのも判断材料になると言えるでしょう。自分の**能力**はほぼ全開させたが（高学歴と良い就職等）、周りの人への配慮や良い行いや、**愛、喜び、親切**等の面はお粗末だったとすると、「**世の光**」としては十分に輝かなかったことになり、**減点**されてしまうでしょう。又、神様は心の中をお見通しですので、各自の報いは傍から人が見るものよりかなり違ってくるものと思われます。新約聖書の中で、イエス・キリストは、多くの人の多額の献金と比べて「**わずかのお金**」を献金した未亡人を、「**自分の全財産**」を献金したとして褒められました。教会で存在感の薄い**クリスチャン**が「**天の御国**」では有名な牧師や指導者よりも遥かに素晴らしい報いを受けることも多いと思われます。

「**御霊の賜物**」をどれだけ又どのように用いたかも「**天に宝をたくわえる**」ための主要な判断基準になると思われます。聖書によると「**御霊の賜物**」は教会を力強く前進させる（＝教会を建て上げる）ために各**クリスチャン**に与えられているものです。即ち、「**御霊の賜物**」は教会時代（**聖霊時代**）を前進させ発展させる大切なものです。「**御霊の賜物**」の解釈には難しい面もありますので、ここでは**ローマ書**で取り上げられているものを紹介しましょう。教会を前進させる賜物は**預言**（聖書の深みを理解させる）、**奉仕、教える**（聖書を誰にでも分かりやすく教える）、**勧める、分け与える、指導する、慈善を行う**などです。それで、自分に与えられた「**御霊の賜物**」を着実に用いて教会を前進させた**クリスチャン**は「**天の御国**」でその分の報いを受けることになると思われます。

これで**クリスチャン**がなぜ毎週、そして一生涯、教会生活を続けるのか、その意味と意義が十分にお分かりになれたかと思われます。教会には**クリスチャン**が「**神の家族**」として集まりますが、所詮**罪人**（赦された罪人）の集まりですので、人間関係で躓いて教会に行かなくな

る人も出てきます。意見が分かれて教会員の間には不和が起こり、その結果教会が輝けなくなることがあります。教会が「**世の光**」として輝かないなら、それは「**ご聖霊の時代**」において重大な問題になるのです。ですから、各クリスチャンが「**御霊の実**」を实らせながら「**御霊の賜物**」を教会で用いること、例えば、**愛と喜びと親切をもって教会で奉仕すること**はとても大事なことであり、「**天に宝をたくわえる**」ことになるのです。又、**自制と誠実と寛容[忍耐]**を働かせて自分の能力（学力や技術のスキル）を十分に発揮させ、社会に貢献することも「**世の光**」として輝くことになるのですから、「**天に宝をたくわえる**」ことと関係してくると思います。

星野富弘さんの証しはこのことを最も分かりやすく現わしているものです。大きな事故により人生を失っていた星野さんはイエス・キリスト（**聖書の福音**）を信じ、それまで気づかなかった自分の才能を発見し、誰よりも発揮させて世界中の人に励ましと感銘を与えています。「**天の御国**」では、星野さんの喜びは、完全な「**復活の栄光のからだ**」を頂くだけでなく、「**天に宝をたくわえた分の大きな報い**」が与えられることで更に増し、全世界のクリスチャンも大いに納得し共に喜ぶことで、最大の誉あるものとなるでしょう。

人生には**不条理**と覚えることが多々あります。身体障害や知能障害や心の病の発病や生まれつき病弱・軟弱な身体を持って**過酷な人生を歩む人**、戦争や犯罪や災難や事故や病気で愛する人を失って**失意の人生を歩む人**が数多くいます。世界中の多くの人々がこれらの人と寄り添い具体的な助けを与えていることには心から頭がさがり尊敬します。私はこれらの不幸な人々を十分に慰め励ますことばをまだ見つけることができません。しかし、星野さんの人生は少なくとも、このような人々に対しても、人生には大きな意味と素晴らしい未来の希望が必ずあるのだと、慰めと励ましを与えています。

創造者なる神は人の**全ての悲しみを喜びに変える**ことのできる方です。又、神はこのように**不条理や不幸**にあっている人には、各自の人生に合わせて**憐れみ深い公平な「裁き」**をなされます。「**天の御国**」では障害や病の中で人生を歩んだ人が、星野さんのように健常者より遥かに素晴らしい報いを受けることもあるのです。永遠の主権者なる神のご計画の中にあっては、もしかしたら**不幸や不条理**はないのかもしれない。

表に見える行いだけでなく心の中を評価される神様ですが、表に見える行いでも、「**御霊の実**」を結び「**御霊の賜物**」を用いることに繋がる（＝「**天に宝をたくわえる**」）ものが数えきれないほどあります。特に大切なのは、上記で述べたように**教会生活**を大切にしていることです。神が特別に定め、祝福すると招いておられる「**主日礼拝**」を大切に守っているクリスチャンは、守らない人より「**天に宝をたくわえている**」こととなります。教会の前進（＝神の国の前進）の為に自分の賜物（特に**御霊の賜物**）を用いて奉仕するクリスチャンは、賜物を用いないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」こととなります。教会（神の国）の前進の為に忠実に献金しているクリスチャンは、献金しないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」ことになるでしょう。世界の福音宣教など、その他の献金をしている人も、しないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」こととなります。

他の人の罪を赦すクリスチャンは、赦さないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」こととなります。苦しくても辛くても聖書の神のことばを信じ耐え抜き、喜びと感謝を表す人は、喜びと感謝を表さないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」こととなります。伝道に励んだクリスチャンは牧師でも信徒でも、伝道しないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」こととなります。辛くても教会の奉仕（例えば教会学校の教師や会堂の掃除や礼拝の花の当番や教会役員の方の奉仕など）を最後まで貫いた人と、途中でギブアップしたクリスチャンとでは、最後まで貫いた人がより「**天に宝をたくわえている**」こととなります。

教会に忠実に行くクリスチャンは教会に行くことを止めたクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」ことになります。このように数えきれないほどあるのです。

「**信仰生活**」を継続することは生易しいものではありません。特に日本では、この世の魅力に対する自分の罪の弱さに加えて、「**外国の宗教**」と変人や白い目で見られる辛さや、ノンクリスチャン家族の反対や、教会の人間関係の難しさなど、信仰の妨げと挫折に繋がるものが数多く存在します。このような苦難と困難の中では、忠実に**教会生活**を続けることだけでも、日本では「**天に宝をたくわえている**」ことになるのです。そして**教会生活**を続けているなら知らず知らずに「**天に宝をたくわえている**」ことが、他にも数えきれないほど出てくるのです。

又、見えない面、例えば神様との個人的な時間（一人で聖書を読み祈る「静思」の時間）を大切にしようとして心がけているクリスチャンは、忙しく動き回って神様との個人的な時間を大切にしないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」ことになるでしょう。神様の前に毎日聖く歩みたいと心がけているクリスチャンは、聖い歩みに頓着しないクリスチャンより「**天に宝をたくわえている**」ことになるでしょう。聖書の中に「**天の御国**」で与えられる「**五つの冠**」のことが記されています。その中の一つに「**義の冠**」があります。これはキリストの再臨を真摯に待ち、聖い生活に専念する人たちに与えられるようです。神には全ての見えない行為（動機も含めて）も明らかですので、全ての行為に対して正しい裁きを行われるのです。

上記の**タラントの譬え**の中で、もし5タラントの人が2タラントだけ稼いだ場合とか、2タラントの人が3タラントも稼いだ場合はどうなるのでしょうか。これらのことについて聖書には何も書いてありません。クリスチャン生活には「**減点**」や「**加点**」の対象になることも多くあると思いますが、それらは**神のみぞ知る**ことであり、神のさばきは間違いなく完全で公平です。

さてここで、死ぬ間際に信仰告白をしてクリスチャンになった人たちの報いはどのようにするのかを考えてみたいと思います。これらの人たちは地上では「**天に宝をたくわえる**」機会がありませんでした。このような人たちの場合、第一段階の「**天の御国＝完全に近い地球**」に入る時にはどのような扱いを受けるのでしょうか。この場合は「**御霊の実**」と「**御霊の賜物**」は**ノンクリスチャン**の行為と賜物と重なる面があることから、少し説明ができると思います。

御霊の実である**愛、喜び、平和**等はクリスチャンでなくても多くの人が家庭、職場、社会で発揮しています。この面でクリスチャン以上に優れた人たちも多くいます。又、「**御霊の賜物**」も個人の**能力**や**才能**と重なる面がありますので、自分の能力と才能を十分に出し切って生きた人で、死ぬ寸前に信仰告白した人の場合は、知らずして「**御霊の実**」を結ぶ生活と「**御霊の賜物**」を用いることに匹敵する、或はそれらに近い「**良い行い**」を行ってきた人とみなされ、**クリスチャン**になった時に、過去の生活の分まで遡って評価される（加算される）ことになると思います。だからこそ、**クリスチャン**と**ノンクリスチャン**に関係なく、真摯に真面目に勤勉に人生を送ることはとても大切なことなのです。

逆に、「**御霊の実**」を結ばず「**御霊の賜物**」も殆ど用いなかったクリスチャンと、それらに匹敵する「**良い行い**」が殆どなく土壇場で「**入信**」した人は、残念且つ厳しい見方になりますが「**天の御国**」では殆ど報いはないということになるでしょう。勿論これは**やや極端な理論上**のことで、実際には神の憐れみを十分に受けることができると思います。しかし、この極端なケースであったとしてもまだ素晴らしい朗報が残っています。この後の「**新しい天と**

新しい地」のところで説明します。

では次に、品行方正で誰が見ても**非の打ちどころがない人生**を歩んできた人が、生きている間は自分の「**義**」を前面に出して**キリストの福音**を拒み、死ぬ寸前で信仰告白して死んだ場合と、誰が見てもこの人より遥かに罪の弱さと大きさとで苦しみ、信仰を持って**御霊**に導かれておりながら、いつも敗北感でもがきながらも、**どうにか信仰生活を貫き**天の御国に入った人（**殆どのクリスチャンはこの人に同感!**）とは、「天の御国」においてどのような違いがあるのでしょうか。これは、前者の善人と後者の弱きクリスチャンの差は「**御霊に導かれる信仰生活**」を**体験したか体験しなかったか**に出てくると思われまます。前者は「**御霊に導かれる**」生活を体験していませんので、その意味が分かりません。「**御霊に導かれる**」生活の体験は「**天の御国**」の**味**を何倍も豊かにするのです。

初代教会のクリスチャンはキリストがすぐにでも戻って来られると信じていました。しかし、キリストはすぐには戻って来られませんでした。なぜキリストはすぐ戻って来られなかったのでしょうか？未だに戻って来ておられません。これは**クリスチャン生活の為にとっても重要**です。それは、ご自分の愛する独り子キリストを、十字架の死にまで追いやり全人類の罪を贖われた神が、その贖いを**基**に**創造の前から用意していた「御霊の時代**」を、できるだけ多くの方が十分に味わうことができるためなのです！聖書はキリストがまだ戻って来られない理由を「**多くの方が救われるため**」と言っていますが、「**救われるため**」とは、**永遠の滅びのさばき**を免れると言う**消極的**な理由以上に、**御霊に導かれる生活の素晴らしさ**を多くの方が味わうと言う**積極的**な理由があるのです。旧約聖書で約束されていた「**新しい契約（神の御霊が人生を導く）**」がどれほど素晴らしいものかを私達が十分に経験するためなのです。

世界中のクリスチャンに慰めと励ましと感動を与えた「**フットプリント（足跡）**」の言う詩がこのことをよく表わしています。少し私的説明になりますが、あるクリスチャンがキリスト（見えないキリスト＝御霊）と共に歩んでいました。その人は天国（詩は「夢の中」）で自分の人生の足跡をキリストと共に振り返ります。浜辺に二人分の人生の足跡があります。途中で足跡が一人分になります。その時はそのクリスチャンが人生の中で最も苦しんでいた時でした。そして再び足跡は二人分になります。これを見たクリスチャンはキリストに訴えます。「**なぜあなたは最も苦しい時に私を離れて私を一人ぼっちにしたのですか**」と。キリストはそのクリスチャンに優しく答えます。「**あなたが最も苦しい時、私はあなたを背中におぶっていたのですよ。その一人分の足跡はわたしのものですよ**」と。

私たちが「**天の御国**」でキリストと顔と顔を合わせて対面するとき、全てのクリスチャンは「**御霊に導かれてキリストと共に歩んだ**」その全貌を見ることになるのです。その時の感動はどれほどのものになるのでしょうか。満点頂けるような善人として生き、死ぬ間際に信仰を持ったクリスチャンはこの感動はいただけません。苦しみながらもがきながらも「**御霊に導かれる信仰生活**」を歩んだクリスチャンとの差がここに現れるのです。

自分の**信仰生活・教会生活**において、**キリストの十字架の贖いと、神の愛と、神の子どもとして御霊に導かれる扱いを受けた経験的価値**がどれだけ大きく素晴らしいものであったのか、それは「**天の御国**」で初めて本当に知ることになるのです。異邦人の救いのための宣教師であったパウロは、クリスチャンの信仰生活の苦しみと困難に関して、「**今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらす**」と言いました。パウロはクリスチャンの地上での苦しみと困難は「**軽い**」と言っています。クリスチャンは各自が「**天の御国**」で神から**永遠の栄光**をもたらす報いを受ける時、「**御霊に導かれた信仰生活**」の価値の**重み**も初めて知ることになるのです。

上記の説明が、父なる神が**キリストの再臨**を遅らせている理由だと言えるとと思います。旧約時代は「**律法の時代**」とも言われ、約 2000 年と言う学者もいます。それに対して「**教会時代(新約時代)**」、又は「**聖霊の時代**」、更には「**恵みの時代**」とも言われる私たちの時代も約 2000 年が経過しています。この考えだと、ちょうど「**律法の時代**」と「**恵みの時代**」のバランスが取れることになります。もしかしたら**キリストの再臨**はそんなに遠くはないのかもかもしれません。

キリストの再臨の前兆がキリストによって預言されています。それによると**キリストの再臨**直前は、世界は**経済的、政治的(戦争やテロ)、自然界的**に未曾有の危機と混乱の極限の中にあるようです。クリスチャンは聖書のこの時を「**患難時代**」と称しています。クリスチャンはこの「**患難時代**」に入る前に「**天の御国**」に行くことになるようです。今の世界情勢や自然災害を見ていると、「**患難時代**」がすぐにでも来るような気がします。

最後に「**天の御国**」の最終段階である「**新しい天と新しい地**」のことをもう少し説明します。前の方で「**新しい天と新しい地**」には**海**がないと言いましたが、そこには**太陽**もありません。**太陽**がないのに**夜**はありません。**神が照らす**からだと書いてあります。又、**新しいエルサレム**が**聖なる都**(多分首都)として存在しますが、そこには**神殿**がありません。**神とキリストが神殿**であるからと書いてあります。更に、「**すべて汚れた者や、偽りを言う者は、決して都に入れない**」とも書いてありますので、これらの「**罪人**」をどのように理解するかは難題です(「**新しい天と新しい地**」=「**聖なる都エルサレム**」?)。「**新しい天と新しい地**」の教えにはこのように、人間の頭では理解できない面がまだ幾つか残っているとしても、神によって創られる完全に完成した「**天の御国**」ですので、第一段階の「**天の御国**」より遥かに素晴らしいものになります。

「**新しい天と新しい地**」に入ると、全てのクリスチャンは**同じ立場で同じ内容**の**主の豊かな祝福**を受けることになるのではないかと思います。第一段階の「**天の御国**」にあった報いの違いは「**新しい天と新しい地**」にはないと言うことです。みんなが**平等に全く同じ祝福**に与るのです。死ぬ間際に「**信仰告白**」したクリスチャンも、人生の途中でクリスチャンになった人も、小さい時から信仰を持ち多くの試練を通りながら、豊かな「**御霊の実**」と「**御霊の賜物**」を開花させ、大いに「**世の光**」として輝いたクリスチャンも、あまり「**世の光**」として輝けなかったと反省するクリスチャンも、その各自の**信仰の歴史の内容**(記録)と第一段階の「**天の御国**」の**報いの内容**の記録は永遠に残るとしても、「**新しい天と新しい地**」の祝福は各自全く同じであると思います。それで、「**天に宝をたくわえる**」ことに対する報いは「**第一段階の天の御国**」においてのみ現実のものとなるのだと思います。ですから、どのような人生を歩もうとも、死ぬ前に「**聖書の福音を信じる**」ことはとても重要なことになるのです。

長い文章を読んでくださりありがとうございました。この文章を含む**ホームページ**の三つの文章は私の**個人的な理解**もあり、決して**断言**することはできません。しかし、私が現在かなり強く確信している聖書の「**天の御国**」に関するクリスチャンの一つの可能な見解です。これらの三つの文章によって少なからず、**聖書の教える救いとクリスチャンがなぜ洗礼を受け教会の礼拝を毎週守るのが**少しはお分かりになれたと思います。ぜひ勇気を出して先ず「**聖書の福音**」を信じ、更には、教会に来て「**キリストの弟子**」となることを心からお勧めいたします。

佐世保キリスト福音教会
牧師 坂口文雄